

KOBEの本棚

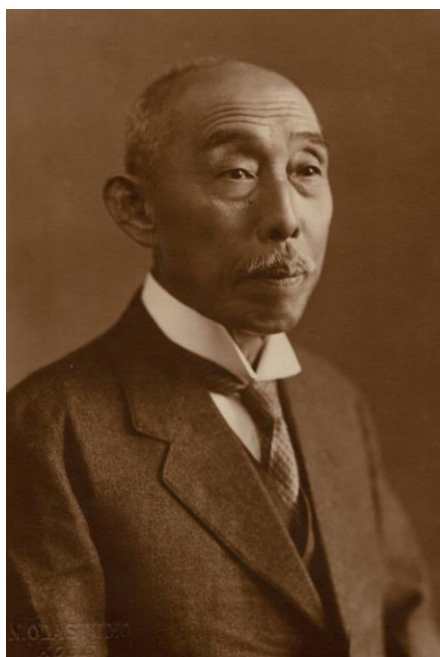
—神戸ふるさと文庫だより—

第 101 号 令和 4 年（2022年）7月 20日

編集・発行 **神戸市立中央図書館**

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078)371-3351 FAX : (078)371-5046



初代神戸市長 鳴瀧幸恭



「布引水源五本松貯水池堰堤外面」

このたび、鳴瀧市長の御曾孫より市長の写真(複製)四葉を神戸市立中央図書館に寄贈いただきました

写真出典：

(左) 『神戸市初代市長鳴瀧幸恭肖像写真』

(右) 『神戸市水道誌』（神戸市役所 明治四十三年）

初代神戸市長 鳴瀧幸恭^{ゆききょう}

明治二十二年（一八八九）、市制が施行され、神戸市が誕生しました。初代市長となったのは、当時神戸区長を務めていた鳴瀧幸恭でした。

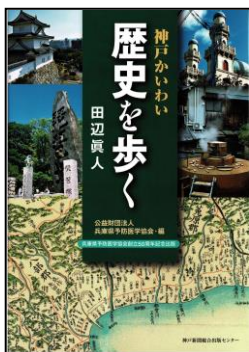
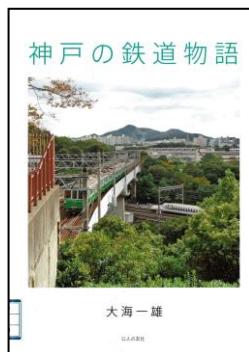
鳴瀧市長の行った事業として知られているのは水道の布設です。明治初期に流行したコレラによって公衆衛生の重要性が説かれ、また国際港湾都市のインフラ整備としても、上水道事業は急務でした。しかし、費用が莫大となるため市会には紛糾し、可決に導くのに約四年、国会の承認を受けて補助金を得るには更なる歳月を要しました。着工後三年の大工事を経て、明治三十三年、市民への給水が始まりました。『神戸市史』『神戸市水道七十年史』などから、技術面はもとより、粘り強く事業を進めた行政面の苦勞が伝わってきます。神戸市の議会政治の始まりにおいて、鳴瀧市長は、市会・財界・市民の声をよく聞いて自治の発達を促し、学舎の建造や道路の開削など多くの事業を行い、十二年の任期を務めました。

参考文献・伊藤貞五郎『神戸市長物語』
曾我部芳吉編『系図かがみ』ほか

神戸かいわい歴史を歩く 田辺眞人
兵庫県予防医学協会編（神戸新聞総合出版センター）

「布引の滝と清盛・重盛」「三ノ宮駅の円柱と『火垂るの墓』」など、目次を見ると意外に身近な神戸のあちらこちらが歴史の舞台になっていることが分かる。

阪神・淡路大震災の数か月後に書かれた「四百年ごとの大地震記録」では、歴史書に記された大地震を取り上げて近畿地方にも危険性があつたことを指摘し、「社会的な経験を、未来のヒントとして役立てるのが歴史の役割」としている。ふるさとの歴史には忘れてはならない先人の経験や知恵が詰まっている。



神戸の鉄道物語 大海一雄（公人の友社）

明治七年に大阪―神戸間で官営鉄道が開業してから現在までの神戸の鉄道の歴史を綴っている。

官営主導から私鉄が次第に台頭し、さらに市電や地下鉄などが都市のインフラとして整備されていく様子を詳しく解説するとともに、発電や住宅整備などの周辺事情にも触れている。大正末期の民間地下鉄会社案など実現しなかった計画についても言及している。

写真や地図も多く掲載され、時代ごとの鉄道事情が理解しやすい。

イニエスタ・ジャパン！―日本に学んだ人生で大切なこと アンドレス・イニエスタ（ぴあ）

強豪バルセロナを退団し、ヴィッセル神戸で活躍を続けるイニエスタ選手が、退団と来神の裏側、怪我や心の病との闘いなどを赤裸々に語る。世界に名を馳せる活躍の源には、チームの仲間やスタッフ、サポーター、家族、全ての人への感謝を常に忘れない姿勢があつた。サッカーファンはもちろん、そうでない人も手に取ってもらいたい一冊だ。

神戸発展異論―もうひとつの地域経済論 寺岡寛（信山社出版）

神戸は新しいものを食欲に取り入れ、「山、海へ行く」「ファッシュョン都市」「アーバンリゾート都市」といったスローガンをかけ発展してきた。しかし、著者は、経済の落ち込みと震災による衰退を危惧する。計画に固執するさまを「神戸病」としつつ、愛を持って神戸の未来像を考察した。世界に開かれた「高度国際港湾都市」。これが神戸のあり方だとし、港湾物流機能のデジタル化について説いている。

神戸・長田のちいさな子守唄 NPO法人DANCE BOX 国際交流基金アジアセンター企画・発行

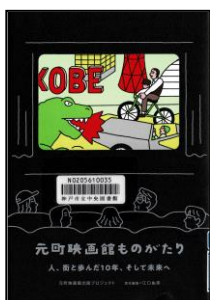
「子守唄を、うたっていただけないでしょうか」長田で活動するNPOが、周辺に暮らすアジア地域にルーツのある九人から子守唄とそれにまつわる思い出を集めた。ページを開くと各言語の歌詞と訳が並び、思い出を描いた絵には、美しいアジアの布を思わせる色彩が広がる。故郷と家族を思い繰り返し歌う調べは、慈しみ慈しまれた記憶として受け継がれていく。

元町映画館ものがたり―人、街と歩んだ10年、そして未来へ 元町映画館出版プロジェクト編（元町映画館）

元町映画館は、令和二年の夏に開館十周年を迎えた。その開館の経緯、スタッフたちの半生、緊急事態宣言下の臨時休館中の取り組みなどを振り返っている。

コロナ禍で常連客以外からも支援を受けたことに触れ、林支配人は、これからの十年で地域にとって意味のある場所になりたいと未来を見据える。

元町映画館に行ったことがない人でも、本書を通して映画館と、映画館を支える人々に親しみを持つことができる。



帆神—北前船を馳せた男・工業松右衛門— 玉岡かおる (新潮社)

江戸時代中期、工業松右衛門は播州高砂の漁師の家に生まれ、船乗りとして兵庫津を拠点に活躍した。全国の海を駆け巡る中で得た知見を活かして帆布の改良に取り組み、彼が発明した「松右衛門帆」は日本の海運業に革新的な発展をもたらした。更には択捉島、箱館(函館)などの築港を手掛け、新たな工法を次々と生み出していく。晩年に幕府から与えられた姓が示す通り「工夫を楽しむ」人生だった。

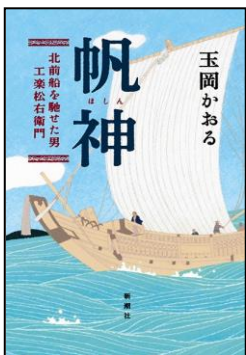
神戸の港が今と変わらず広い世界につながっていたと実感させてくれる、海の男の一代記である。

コスメの王様 高殿円 (小学館)

地元の家族を支えるために神戸に出てきた少年・利一と牛より安い値段で花隈に売られてきた少女・ハナ。二人が神戸教会のそばにある大きな銀杏の木の下で出会ったのを機に、物語は動き出す。酒販売店で経験を積んだのち、利一は独立し、東洋の化粧品王を目指して奔走する。一方、ハナは大関芸妓・花千代としての道を歩む。明治三十六年に花隈で創業した化粧品雑貨の卸売商「中山太陽堂」をモデルに、互いに惹かれあう二人の人生模様が描かれている。

死にふさわしい罪 藤本ひとみ (講談社)

神戸にある伯父の別荘を訪れた高校生の和典は、須磨駅で芽衣という女性に出会う。芽衣の夫が一年前に失踪していることを知り、真相を調べ始めると、偶然にも彼は和典が読んでいたブログの作者であった。仕事上のトラブルや芽衣の親族との確執など、いくつかの可能性をたどりながら調べていくうちに、物語は予想外の方向に展開していく。終盤には、タイトルの所以が明かされる言葉が……。



神戸 その24
あんな人こんな人

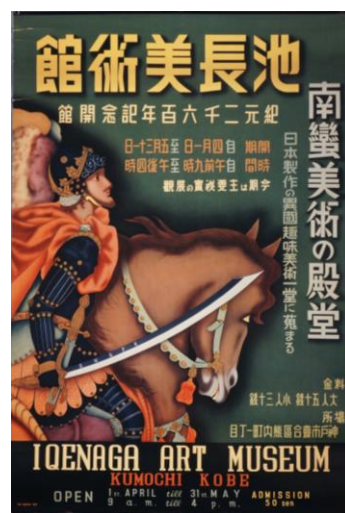
池長 孟 いけなが・はじめ

明治24年(1891年) ~ 昭和30年(1955年)

池長孟は兵庫区生まれの資産家で、昭和初期の南蛮美術の収集家です。植物学者牧野富太郎の窮状を知り、兵庫区会下山に「池長植物研究所」を開設するなどの援助をしたことでも知られています。

昭和13年、収集品を公開するため神戸初の美術館となる「池長美術館」を葺合区熊内町に建てました。著書『南蛮堂要録』では「神戸のような国際大都市」に美術館の一つもないことを嘆き、社会教育の重要性や美術品収集、鑑賞などに対する考え方を「美術館開設の本旨」として記しています。

終戦後には、美術品への財産税など多額の税金が課されました。その支払いのため収集品の維持が困難となり、散逸をおそれた池長は昭和25年、神戸市に引き取りを打診します。翌年、池長美術館の建物と約4500点の南蛮美術コレクションは神戸市に委譲され、神戸市立美術館(のちに神戸市立南蛮美術館に改称)となりました。昭和57年、その収蔵品は旧居留地に開館した神戸市立博物館に引き継がれ、建物は現在、神戸市文書館として使用されています。今、私たちが博物館で見ることができる「聖フランシスコ・ザビエル像」も、元は池長のコレクションでした。



【参考】『南蛮堂要録』池長孟(池長美術館, 1940)、『神戸史話』落合重信, 有井基(創元社, 1967)、『南蛮堂コレクションと池長孟』(神戸市立博物館, 2003) 【画像】池長美術館第1回ポスター 昭和15年(神戸市立博物館蔵)

神戸港の日本茶輸出

明治時代、神戸の外国人居留地には芳しい日本茶の香りが漂っていました。十七世紀、中国から西洋に緑茶が伝わり、アメリカを中心に嗜好品として飲まれるようになりました。開港当時、茶は生糸と並ぶ日本の主要輸出品でした。『神戸税関百年史』によると、神戸港の明治二十年（一八八七）ごろまでの輸出額の首位を、茶がほとんど独占していたことが分かります。

茶を輸出する際には、保存のため茶葉に火入れ・乾燥等を施す、再製と呼ばれる作業が必要です。明治初期、再製工場は居留地の外国商館の中にありました。神戸市庁舎三号館別館（中央区江戸町）の解体工事の際に発見された九十七番地の遺構は、茶輸出商・ヘリヤ商会の再製工場であったと報告されています。明治九年には既に十ヶ所あまりの再製工場が神戸にあり、千人ほどの人々が働いていました。

再製工場で働く人の多くは神戸近

隣から集まった日雇いの女性たちで、「再製茶女工」または「茶焙婦」と呼ばれました。四〇度を超える工場に働く女工の仕事は大変厳しいものでした。当時の新聞には「彼の居留商館にてハ茶焙婦を取扱ふの法甚だ惨酷にして或ハ茶釜の熱に辟易して絶倒するもの杯のある時は之を井戸端に引きづり出して頭から水をブツ掛ける等の事は毎度珍しからぬ事なり」（『神戸又新日報』明治二十年八月二十六日）と、その仕事内容の過酷さと、待遇の悪さが書かれています。それでも、日々糊口をしのぐため、須磨や垂水から居留地へ通う女工もいました。

再製から輸出までは外国商館で行われており、日本人の茶商は茶葉を産地から仕入れ、外国商館へと売る売込商うりこみしょうでした。開港後、茶の輸出入量が急激に増加したため供給が追いつかず、品質の悪い茶や混ぜ物をした偽茶を売る売込商が多く現れ、次第に日本茶の評判は悪くなっていきました。そして、明治十六年、主な輸出入先であったアメリカが「鷹製茶輸入禁止条例」を公布したことで、茶貿易は苦境に立たされます。粗悪茶の製造を防ぐため、神戸でも様々な

取り組みが行われました。

同年十月に、茶の品評会である第二回製茶共進会が神戸で開催されました。その際、実業家で貿易にも携わっていた大倉喜八郎らが善福寺で製茶集談会を開き、粗悪茶の問題について話し合いました。そして、その結果に基づき、製茶業を統率する茶業組合の公設を政府に請願しました。政府はこの請願を受けて、「茶業組合準則」を制定し、各府県に茶業組合総合会議所を設置し、さらにそれを統轄する中央茶業本部を創設すること等を定めました。中央茶業本部の幹事長には大倉喜八郎、幹事には山本亀太郎らが選ばれました。準則を受けて同年、神戸市茶業組合も発足します。



諏訪山公園 山本亀太郎頌徳碑

山本亀太郎は、茶の売込商として、明治六年に、神戸市海岸通四丁目に店を開きました。早い時期から神戸で製茶改良事業に奔走し、明治十四年には茶商数名と共に、神戸製茶改良会社を設立します。また、再製茶女工の待遇の悪さを憂い、改善を目指して、相生町に山本製茶再製所を建設しました。売込商としても大成し、明治二十一年には、神戸売込茶商中最大の約三四六万斤の茶を、ヘリヤ商会と取引していた記録が残っています。没後の大正二年に建設された頌徳碑は、今も諏訪山公園に残り、その功績を伝えていきます。

品質改善への努力も粗悪茶を根絶するには至らず、紅茶・コーヒーの需要の増加もあり、神戸の茶貿易は衰退していきます。そして、明治三十二年の清水開港によって、茶貿易の中心は静岡へと移りました。居留地に並んでいた再製工場も、静岡に移転したり店を畳んだりし、神戸港の貿易産業の中心は、紡績糸や燐寸マンチ等の工業製品に移っていきます。

参考文献

『旧神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書』
『日本茶貿易概観』 栗倉大輔『日本茶の近代史―幕末開港から明治後期まで』ほか